

Title	「栞（しおり）」で読む日本人移民社会：日米移民教育の諸相
Author(s)	横田, 睦子
Citation	大阪大学, 2002, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/43281
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、 〈a href="https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed"〉 大阪大学の博士論文について 〈/a〉 をご参照ください。

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

氏名	横 田 睦 子
博士の専攻分野の名称	博 士（言語文化学）
学位記番号	第 17158 号
学位授与年月日	平成14年3月25日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当 言語文化研究科言語文化学専攻
学位論文名	「栞（しおり）」で読む日本人移民社会—日米移民教育の諸相—
論文審査委員	（主査） 教授 仙葉 豊 （副査） 教授 中埜 芳之 助教授 小口 一郎

論 文 内 容 の 要 旨

本論文は、日本から大量の移民がアメリカ西海岸・ハワイへと渡った19世紀末から、「排日移民法」が制定された1924年までの間に、渡米希望者及びアメリカで暮らす日本人移民たちの間に流布したリーフレット・パンフレット及びそれらの発行団体などが中心になって行っていた渡米移民教育事業の内容を紹介し、分析を加えたものである。又、関連の資（史）料から当時の無名の渡米希望者・日本人移民たちの姿を明らかにするものである。題名に使用した「栞（しおり）」は元々「枝折」と記し、「道しるべ」を意味する。これを踏まえて、本論文では、渡米希望者・日本人移民たちの「道しるべ」の役割を果たした、一枚刷りの栞（リーフレット）、小冊子（パンフレット）、そして様々な移民教育の総称として「栞」という表現を用いる。

本論文では、日本人移民史を三期に大別し、それぞれの時期の移民社会の構成員が、異文化圏であるホスト社会、アメリカをどのように捉えていたか、又、移民社会内部に対してどのように働きかけていたのかを「栞」を通して論証した。「はじめに」に続いて、第1章研究史・研究の方法、第2章日本人移民史—「渡米」から「排日」まで—、第3章初期移民渡米期の「栞」、第4章移民渡米全盛期の「栞」、第5章排日対応期の「栞」、第6章「栞」に何を讀み取るか—結びにかえて—の6章からなる。さらに、当時の就学率、体位の平均値などを示す資料と年表『「栞」と日本人移民史』を添付した。

本研究が、従来の日本人移民研究と異なる点は、上記で述べたような資料、リーフレット・パンフレットを、研究の中心に据え、分析を加えたことである。これらの資料に、日米外交史及び当時の日本・アメリカ両国における民衆言論を重ね合わせることによって、アメリカ日本人移民社会に生きた無名の人々の姿を明らかにすることができたと考える。さらに日本人移民の識字率は当時から高かったとされているが、本論文では、それが必ずしも、どのような文献をも読解し得るということにはつながらないという前提のもとに、わかりやすい内容のリーフレット・パンフレットが登場したことを論証した。加えて、日本力行会、基督教女子青年会（YWCA）が移民教育を行っていたことについて明らかにし、その全貌にふれた内容についても他に類をみないものである。

以下では、本論文の内容を各章ごとに順に述べる。

研究の動機・視点について述べた「はじめに」以下、第1章では、日本人移民研究の枠組みの中で先行研究の歴史とそのあり方について述べた。さらに本論文における用語の解説を加えた。特に、本論文で「栞」と称した、リーフレット・パンフレットについては、図書館学・書誌学上の説明を加え、その特徴（①小型で薄く軽量②字数が少ない

③難解な用語の使用を避けている④トピックの限定⑤無料あるいは安価、など）から、配布・普及に極めて有利であったとした。また、これらは、通常、他の文献のように特定の分類番号や、分類法がなく、「未整理のグループ」として分類され、図書館において登録手続きが行われない。これが過去に歴史的資料として発掘、整理されなかった要因の一つであると説明した。さらに、内容上の特性として、速報性を主とする印刷物には新聞紙があり、時間的に多少余裕のあるものに雑誌、図書があるが、リーフレット・パンフレットはその中間をいく印刷物である。ある主題についての最新の情報を中間的にまとめたものが多く、内容については実用資料としての価値が一時的なものが多い。価値が一時的であるということは、それらが出版された、ある特定時期の読者が欲する情報を明確に表し、後の歴史資料として有効であるというのが筆者の主張である。又、本論文では分析を加えていないが、他にも様々な「葉」、移民教育の形があったことを紹介した。

第2章では、世紀転換期といわれる19世紀末から20世紀初頭までの日本人移民史を(1)初期移民渡米期、(2)移民渡米全盛期、(3)排日対応期、の三期に分けて概観し、「渡米」と「排日」をキーワードに、日本人移民をめぐる日米双方の社会における歴史的变化について述べた。

第3章では、この時期に数多く出版され、大変な売れ行きを示したといわれる「渡米案内書」を通して、当時の渡米希望者、そして初期の日本人移民社会の実態を明らかにした。この「渡米案内書」は図書館学上のリーフレット・パンフレットには当たらないが、移民たちの「道しるべ」の役割を果たしていた。後に登場する「葉」の中にはこれらの簡約版ともいえるものもある。又、この時期に男性の渡米希望者を中心に移民教育を行っていた宗教団体、日本力行会の移民教育事業について、その実態を明らかにし、分析を加えた。さらに移民たちの証言から、「紳士協約」で就労希望の日本人の渡米が禁じられた後も、この団体が、油紙に衣類などを包んで頭上にくくり付け遠泳をさせるなどの「密航の講習」を行っていたことについても紹介し、「密航」も一つの渡米の形であり、異文化圏への掛け橋であったとした。

本論文において最もページをさいたのが第4章である。移民渡米全盛期としたこの時期の移民層、特に女性が数多く渡米したことに着目し、日米双方の基督教女子青年会(YWCA)と在米日本人会による移民教育を、発行されたリーフレット・パンフレットなどを通して紹介し、その内容について分析を加えた。『渡米婦人講習所概覧』、『渡米婦人心得』、『女子青年界』はYWCAによるものであるが、同時に、移民教育、特に女性向けの情報を享受することなく渡米していた女性たちが経験した数々の困難の産物であり、彼女たちに続くあらゆる層の女性たちへと示された「道しるべ」であった。本研究において、各種資料を重ね合わせることで、リーフレット、『渡米婦人心得』が、渡米する女性であれば誰もが通過する「移民局」において無料で配布されたということを示したことは重要である。又、『渡米婦人心得』はYWCAの移民教育を一枚に凝縮したものであるといえる。

『キャンプの衛生』、『育児及産婦の葉』、『新渡米婦人の葉』は、在米日本人会によるものである。『キャンプの衛生』の「キャンプ」とは、この場合、日本人農園労働者等が集団であるいは単独で生活の場としていた野営の仮設住宅が集まる一定区域を意味する。この「葉」には、「キャンプ」内に「婦人専用便所」などを設けることなどが記されており、日本人移民史における女性の登場を予感させるものである。又、移民社会における衛生問題は、日本人移民をめぐる風評被害を避けるための「急務中の急務」であった。『育児及産婦の葉』は子供の出生届に関する項で始まっている。属地主義の国、アメリカでの出産は、次世代の移民社会を担うアメリカ市民を出産することである。同時に、属人主義の母国、日本にも出生届を出すことによって、移民たちは日米両国における利権の確保に努めた。『新渡米婦人の葉』では、日本人女性として体面を汚さないように努める「消極的責任」とホスト社会、アメリカに対する「積極的責任」をあげ、「米国に同化すると同時に日本婦人の進化を広く米国に知らしめ世界における一等国の婦人として認められるように努めなければならない」と繰り返される。総じて、これら在米日本人会による「葉」は実質的な移民社会での生活の向上を目指すとうたいながらも、随所に政治的背景が窺えるものである。

移民渡米全盛期の「葉」の背景には河上清の「移民社会改善策」があった。その中の「言文一致、かな付きにて、時々一枚刷りの引札を発行して、一般の日本人の品位を高むるに必要な知識を普及すること」という文言こそが、これらの「葉」を産み出す原動力になっていたと考える。河上は日本の内務省からはアメリカに渡った社会主義者として「要視察人」とされていたが、本論文においては、初期移民渡米期の片山潜とともにイデオロギーを超えて無名の日本人移民たちの異文化適応のために奔走するオピニオンリーダーである。

第5章では1924年の「排日移民法」制定を目前に控えた日本人移民たちが日米の間でどのように対応していたのかをハワイ日本人移民社会を通して考察、論証した。この論証によって、この時期にハワイ日本人移民社会に登場した「葉」(『排日豫防の葉 第一』、『排日豫防の葉 第二』、『米化の手びき 第一』、『米化の手びき 第二』、『米化の手びき 第三』)の内容、すなわち、当時のハワイ移民社会における民衆言論の一端に映し出された当時の移民たちの姿を明らかにした。

第6章は本論文を総括するものである。前出の三期における「葉」を比較しながらその機能について述べ、「葉」が異文化社会における情報提供のための出版物から、アメリカでの生活者として受容されるためのものへ、そしてさらに、アメリカでの「排日」に対応する手段を講じるものへと変容を遂げていると分析した。加えて、「葉」が移民社会に与えた「負」の情報についても述べている。又、移民社会において、出版物としての「葉」が「紙上の学校」であり、「葉」の発行者・団体は一種の「文化化のエージェント(enculturation agent)」であったとした。最後に、本論文で分析を加えた「葉」の一葉一葉が、当時の移民社会と現在を結ぶ歴史の証人であるとし、これらの「葉」が筆者にとって今後研究すべき多くの課題を教示する「葉」—すなわち「道しるべ」となったと結ぶものである。

論文審査の結果の要旨

この論文は、明治初期から大正末期までの、アメリカへの日本人移民という大きなテーマを、主に、当時発行されていた「葉」と呼ばれる移民の手引きを基礎資料に、民衆言論史を中心とするさまざまな角度から研究したものである。

第1章においては、渡航の手続きから移民後の生活のあり方までの細かなガイドブックである「葉」のもつ意味合いが、大きな日米文化交流という文脈の中で、民衆言論史として読まれるべきであるとする視点が提示されている。

第2章では、明治期以来の日本人の移民史を、(1)初期移民渡米期、(2)移民渡米全盛期、(3)排日対応期という3つの時期にわけ、それぞれの時期の特徴を、日米文化交渉史の文脈の中で概観している。

第3章では、上述の第1期、つまり初期移民渡米期に、広く配布されて大きな役割を果たした、さまざまな「渡米案内書」の精査を通して、当時の民間移民の実情を具体的な資料をもとにして記述している。基本的な資料としては、当時、移民教育を行っていた宗教団体であった島貫兵太夫の日本力行会関係のものや、片山潜の『渡米案内』などを中心に、さまざまな資料が駆使されており、乗船心得から検疫、上陸そしてアメリカでの生活案内などが記述、分析されているのが新鮮である。

第4章では、渡米移民全盛期の移民の実態が、基督教女子青年会(YWCA)の活動を中心に論及されている。当時は、主たる「葉」は無料で配布されていたこともあり、渡米を意図するものにとっては、数少ない貴重な情報を手軽に与えてくれるものであった。この章では、『渡航婦人講習所概覧』、『渡米婦人心得』、『新渡米婦人の葉』など、一般の庶民の女性たちを対象にした、読みやすく分かりやすい文章の婦人用移民ガイドブックが数多く引用され、この時期の女性移民志願者たちの置かれた状況と現実が、詳細に記述されている。在米日本人会などの編纂した『キャンプの衛生』や、『育児及び産婦の葉』など、アメリカ在住の日本女性たちの生活に役立つガイドも、当時のアメリカの移民生活を浮き彫りにしている。

第5章では、排日対応期の移民活動の問題点がテーマとなっている。1924年に制定された排日移民法を頂点とするアメリカ側の日本人移民制限政策により、上述の移民の全盛期が衰退していく歴史的な状況が語られ、具体的なケース・スタディとして、ハワイに渡った牧師で、ホノルルの日本人学校の創設者でもあった奥村多喜衛の出した、排日移民政策に対する対応のパンフレットが、取り扱われている。奥村の『排日豫防の葉』が、移民への反対圧力に対応するために、アメリカ文化への適応と同化を説きつつも、日本人としての伝統の維持という点で、大きな問題が生じてこざるを得なかった点を指摘している。

この論文は、従来省みられることのなかった、移民のためのパンフレットである「葉」を分析の対象にしつつ、明治以降排日移民法による衰退期までの対米移民の実相を記述し分析を加えたものである。日本人の移民研究としては、一部の例外を除いて、日本語の文献や記録を基礎資料とするものは少なく、アメリカの側からのものが多いのである

が、この研究は、和歌山、横浜、ハワイなど移民送出及び受け入れの土地で独自に発掘した資料を駆使しつつ、新たな移民史の一局面を開いたという点に独創的などころがあり、博士（言語文化学）の学位論文として十分に価値あるものと判断する。